

都道府県 番号 8	学校名 茨城県立茎崎高等学校	課程 定時制	学科 普通科	指定期間 26～28
--------------	-------------------	-----------	-----------	---------------

平成28年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

発達障害等により特別な教育的支援の必要な生徒に対する支援の充実を図るため、自立活動を取り入れた「特別の教育課程」の編成に関する研究を行うとともに、教科等における個々の能力・才能を伸ばす指導に関する研究を行う。

2 研究の概要

生徒の社会的・職業的自立に向けた支援の充実を図るため、特別な教育的支援の必要な生徒を含めた全ての生徒に対する校内支援体制の構築及び自立活動の内容を取り入れた特別の教育課程の編成による高等学校における指導の在り方について実践的研究を行う。

具体的には、多様化する生徒の実態に応じて、外部専門家や外部施設を活用した得意分野を伸ばす指導を行うとともに、関係機関との連携、特別支援学校のセンター的機能の活用等を通して、個別の教育支援計画、個別の指導計画を作成し、特別支援教育の視点を踏まえた指導形態の工夫、学習教材の工夫、学習環境の整備、評価の方法等について研究する。

また、自立活動アドバイザーを配置し、学校設定科目の充実及び教科の学び直しやソーシャルスキルトレーニング等を取り入れた特別の教育課程を編成することで、個々の教育的ニーズに応じた指導の工夫・改善を図るとともに、合理的配慮の観点に基づく個に応じた支援の在り方について研究開発を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究開始時の状況と研究の目的

本校には、発達障害等により学習や生活に困難やつまづきを抱える生徒、中学校まで不登校やいじめにあうことを経験している生徒が多数在籍している。また、中学校までの学習が身に付いていない生徒が多数いるため、生徒の実態に応じて習熟度別授業を実施している。

こうした状況を踏まえ、特別な支援を必要とする生徒の調査を行ったところ、中学校時代に特別支援学級に在籍していた生徒が1割程度入学しており、全校生徒数のおよそ半数近くが学習上の課題を抱えていることがわかった。例えば、板書をノートに書き写せない、落ち着きがなく私語が目立つ等、発達障害の特性を示す生徒も在籍している。このような状況から、発達障害やその疑いがある生徒、人間関係を構築することが難しい生徒に対して、より個に応じた支援を行う必要性があると考えられる。

そこで、本研究においては、本校で現在行っている学校設定科目「ライフスキルを高める心理学」、キャンパスエイドの活用等に加えて、自立活動の指導内容を含む特別の教育課程を編成すること等により、学習上又は生活上の課題を改善・克服できるよう支援体制を構築していきたい。具体的には、対人関係や心理的な安定、健康の保持など、

個々の生徒の実態や課題に応じた授業内容を実施して、高等学校における自立活動の指導の在り方を研究する。

本事業2年次に当たる平成27年度入学生からは、特別な教育課程として「自立活動」の枠を設け、「ライフスキルトレーニングA」の履修を選択科目として設定する。さらに、本事業3年次には同じく選択科目「ライフスキルトレーニングB」を設け、生徒が2年次生になってからも選択可能な形にする。併せて、「国語総合」、「数学I」、「コミュニケーション英語I」の中でそれぞれ“ファーストステップ国語”、“ファーストステップ数学”、“ファーストステップ英語”という時間を設け、自立活動の指導の成果を反映させながら学び直しを中心に指導することで、生徒の学びに対する自信や自己肯定感を回復させる取組とする。その他学校生活全般に渡り、自立活動アドバイザーや特別支援教育コーディネーターのアドバイスを受けながら一斉授業の改善を行い、理解しやすい授業づくりを実施する。

(2) 研究仮説

生徒の障害の状態等に応じて、自立活動の「人間関係の形成」等の内容を含む特別の教育課程を編成し、学習上・生活上の困難の改善・克服を図るとともに、個々の能力・才能を伸ばす指導や教科・科目の補充指導等、個に応じた支援の在り方や学習指導の方法を探求し、全ての生徒が安心して楽しく学ぶ環境を整えれば、自立と社会参加が可能になるであろう。

(3) 教育課程の特例

教育課程の特例の内容	指導内容	授業時間数・単位数等
領域として自立活動を設定した。講座名は「ライフスキルトレーニングA」とした。	自立活動の指導内容6領域に基づき、生徒の実態に応じ、「場面を考えよう」「清掃をしよう」「自分のできること・苦手なことに気付こう」「花壇にひまわりを植える」「夏休みの報告」「LED栽培および観察」「野菜サラダづくり」「自分から行動しよう」等の項目で計画的に指導した。	「ライフスキルトレーニングA」：1年次生 2単位 (週2時間)
領域として自立活動を設定した。「ライフスキルトレーニングA」との関連性を配慮し講座名は「ライフスキルトレーニングB」とした。	自立活動の指導内容6領域に基づき、生徒の実態に応じ、「自己紹介しよう」「1年間の目標を設定しよう」「自分にあった学習方法をみつけよう」「お世話になった人に手紙を書こう」「個別の課題に取り組もう」「洗濯をしよう」「昇降口をLEDライトできれいに飾ろう」「職場見学」等の項目で計画的に指導した。	「ライフスキルトレーニングB」：2年次生 2単位 (週2時間)

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行学習指導要領における一斉指導の改善・工夫等）

「国語総合」、「数学Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅰ」で少人数や習熟度別、ティーム・ティーチングの授業を展開する中で、支援の必要な生徒に配慮した指導を実施している。平成27年度からは、タブレット端末を活用した授業の導入を図り、個々の能力・特性に応じた指導法についての研究を推進している。それに伴い、校内にICT活用委員会を設置し、全ての教科・科目、さらには特別活動での活用も範疇に入れつつ授業方法やその形態、活用方法について研究を進めている。

授業の見通しの立てやすさ、環境整備の2点について授業で工夫、改善が行われている。また、ICTの活用やホワイトボードの使用など教材を工夫し、生徒の興味・関心を引き出すような授業を行っている。

(5) 研究成果の評価方法

研究のねらいに即し生徒の実態に応じて事業が進められているか、生徒、保護者、教員に対しアンケート調査を年2回実施する。また、学校生活アンケートや生徒理解チェックリスト、行動の記録、学習記録を基に、設定した目標や指導内容等の妥当性について分析評価する。

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容

三部制定時制単位制の利点を生かして、生徒の興味・関心に応じた多様な選択科目を含めた教育課程を編成している。

学校教育法施行規則第85条に基づき設定する障害に応じた指導「ライフスキルトレーニング」では、自立活動の「人間関係の形成」に関する内容についてソーシャルスキルトレーニング等を中心に授業を行う。生活の様々な場面を想定しロールプレイ等を通して他者とのかかわりや集団への参加について指導する。

評価については、生徒の実態に応じて設定した目標に照らして、例えば「自立活動チェックシート」等を活用した形成的評価を重視する。

(2) 全課程の修了認定の要件

- ① 全課程修了の認定は、以下のすべての要件を満たした者について、校長が行う。
 - ア 生徒が過去に在学した高等学校の在籍期間を含め、3年以上在籍すること。
 - イ 本校に原則として1年以上在籍すること。
 - ウ 各教科・科目及び総合的な学習の時間について、74単位以上の修得が認定されること。ただし、本校における開設科目を10単位以上含むものとする。
 - エ 上記ウには、学校設定科目及び教科「総合」の科目並びに「自立活動」（仮称）の領域に係る修得単位数を合わせて20単位まで加えることができる。
 - オ 本校が定めた必履修教科・科目の「履修」がすべて認定され、総合的な学習の時間が3単位以上認定されること。
 - カ 特別活動の成果がその目標からみて満足できると認められること。
 - キ 生徒が過去に在学した高等学校（中等教育学校の後期課程を含む。）において修得した単位は、上記ウの単位数のうちに加えることができる。
 - ク 本校入学以前の既修得単位については、本人からの「単位修得証明書」添付の所定様式による認定申請により、原則としてこれを認める。

		<ul style="list-style-type: none"> ICT利活用教育関連研修会（eスクール・ステップアップキャンプ）参加 先進校視察 (神奈川県立田奈高等学校，つくば市立並木中学校)
	12月	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学校との共同研修会 つくば特別支援学校との交流（作業体験及び共同学習） 先進校視察 (大阪府立岬高等学校，大阪府立柴島高等学校，東京都立秋留台高等学校，長野県立箕輪進修高等学校) 生徒，保護者，教員へのアンケート調査 第7回校内研究委員会 第3回校内ICT活用委員会
	平成27年 1月	<ul style="list-style-type: none"> 特別支援学校との共同研修会（ICT利活用関連） 教育相談研修会 第8回校内研究委員会 第4回校内ICT活用委員会
	2月	<ul style="list-style-type: none"> 発達障害等教育セミナー 履修相談 第3回運営指導委員会 第9回校内研究委員会 特別の教育課程編成
	3月	<ul style="list-style-type: none"> 第10回校内研究委員会 第6回校内ICT活用委員会 平成27年度入学生対象「高校生活相談」(入学前適応相談)，履修相談 中学校訪問 希望生徒，保護者への説明
第2年次 (平成27年度)	平成27年 4月	<ul style="list-style-type: none"> 特別の教育課程全体実施 「よりよい高校生活のために」(生徒実態調査) 保護者，教員へのアンケート調査 中学校訪問 生徒個人カルテ作成 個別の教育支援計画，個別の指導計画作成 第11回校内研究委員会
	5月	<ul style="list-style-type: none"> 「フレックスセミナー」参加（県立結城第二高校）
	6月	<ul style="list-style-type: none"> 履修相談 第12回校内研究委員会 第4回運営指導委員会 「発達障害のある児童生徒への指導」に関する研修会参加 Education Expo 2015 参加（ICT活用関連） 「学校におけるICT活用研究会」参加
	7月	<ul style="list-style-type: none"> 学校生活アンケート実施 生徒理解チェックリスト

		<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談研修会 ・友五郎塾講演会「発達障害・LD読字障害を知ろう」参加
	8月	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校生活アンケート」に係る研修会 ・つくば特別支援学校公開講座参加 「発達障害のある子への対応」 「通常学級におけるユニバーサルデザイン」 「発達障害のある方とのコミュニケーション」 ・「高校教員ICTセミナー」参加 ・適応教室・児童相談所等訪問 ・先進校視察（兵庫県立西宮香風高等学校）
	9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ケース会議
	10月	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒理解チェックリスト ・履修相談 ・つくば特別支援学校との交流（作業体験及び共同学習） ・「ハイレベルフォーラムinつくば」参加（筑波大学） ・第13回校内研究委員会 ・第5回運営指導委員会 ・先進校視察（東京都立稔ヶ丘高等学校）
	11月	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒理解チェックリスト ・履修相談 ・つくば特別支援学校との交流（文化祭の手伝い）
	12月	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒、保護者、教員へのアンケート調査 ・つくば特別支援学校との交流（作業体験及び共同学習） ・適応教室・児童相談所等訪問
	平成28年 1月	<ul style="list-style-type: none"> ・発達障害に関する研修会
	2月	<ul style="list-style-type: none"> ・履修相談 ・清掃作業トレーニング ・発達障害者就労支援者向け講習会参加 ・発達障害者就労支援者向け交流会（「発達障害者就労への道筋」）参加 ・第14回校内研究委員会 ・第6回運営指導委員会 ・個別の教育支援計画，個別の指導計画の見直し
	3月	<ul style="list-style-type: none"> ・就労支援に関する研修会 ・第15回校内研究委員会 ・平成28年度入学生対象「高校生活相談」（入学前適応相談），履修相談 ・中学校訪問 ・個別の教育支援計画，個別の指導計画作成
第3年次 （平成28年度）	平成28年 4月	<ul style="list-style-type: none"> ・特別の教育課程実施 ・「よりよい高校生活のために」（生徒実態調査） ・保護者，教員へのアンケート調査

		<ul style="list-style-type: none"> ・中学校訪問 ・校内研究委員会
	5月	<ul style="list-style-type: none"> ・第7回運営指導委員会 ・発達障害等教育セミナー
	6月	<ul style="list-style-type: none"> ・履修相談
	7月	<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活アンケート ・生徒理解チェックリスト ・発達障害等教育セミナー（茨城大学教授 荒川 智氏） ・大学との連携（個々の能力・才能を伸ばす取組）
	8月	<ul style="list-style-type: none"> ・大学との連携（個々の能力・才能を伸ばす取組） ・特別支援学校との共同研修会 ・校内研究委員会 ・ケース会議
	9月	<ul style="list-style-type: none"> ・つくば特別支援学校との交流 ・発達障害等教育セミナー（筑波大学准教授 岡崎 慎治氏）
	10月	<ul style="list-style-type: none"> ・第8回運営指導委員会
	11月	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒理解チェックリスト ・履修相談 ・つくば特別支援学校との交流 ・先進校視察 （兵庫県立西宮香風高等学校，滋賀県立愛知高等学校） ・大学との連携（個々の能力・才能を伸ばす取組） ・人間関係づくり研修会 ・校内研究委員会
	12月	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒，保護者，教員へのアンケート調査 ・つくば特別支援学校との交流（作業体験及び共同学習） ・特別支援学校との共同研修会
	平成29年 1月	<ul style="list-style-type: none"> ・特例子会社職場見学 ・ケース会議
	2月	<ul style="list-style-type: none"> ・履修相談 ・第9回運営指導委員会 ・高等学校自立支援モデル事業合同発表会 ・校内研究委員会 ・研究報告書作成

（４）評価に関する取組

実施年次	実施時期	評価計画
第1年次 (平成26年度)	平成26年 4月	<ul style="list-style-type: none"> ・適応相談，中学校訪問での情報集約。 ・アンケート調査の分析により課題等を明確化。
	6月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究の方向性・内容等に関する運営指導委員からの助言。 ・セミナー開催ごとのアンケート実施。
	7月	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケート調査，チェックリストのデータを担任及び関係職員で分析・検討。

	10月	・1年次前期の研究内容等に関する運営指導委員からの助言。
	11月	・チェックリストの結果を基に個別支援計画の検討。
	平成27年 1月	・校内での報告（1年次のまとめと2年次の計画）。 ・アンケート調査の分析により、研究の成果や次年度の課題を明確化。
	2月	・研究の成果と課題に関する運営指導委員からの助言。 ・1年次の研究のまとめと今後の課題を検証。
第2年次 (平成27年度)	平成27年 4月	・生徒実態調査や保護者対象アンケート調査の分析。 ・生徒や保護者のニーズの明確化。
	5月	・セミナー開催ごとのアンケート実施。
	7月	・アンケート調査及びチェックリストのデータを担任及び関係職員で分析・検討の上、活用。
	10月	・前期の研究内容に関する成果と課題の明確化。
	11月	・チェックリストの結果分析により、生徒の変容等を把握。
	12月	・アンケート調査の分析。
	平成28年 1月	・校内での報告（2年次のまとめと3年次の計画）。 ・アンケート調査の分析により、研究の成果や次年度の課題を明確化。
	2月	・研究の成果と課題に関する運営指導委員からの助言。
	3月	・2年次の成果と課題，3年次の計画立案。
第3年次 (平成28年度)	平成28年 4月	・アンケート調査結果の分析。 ・生徒の実態把握。
	5月	・研究の進捗状況に関する運営指導委員からの助言。
	7月	・アンケート調査，チェックリストのデータを担任及び関係職員で分析・検討の上，活用。
	10月	・研究のまとめに関する運営指導委員からの助言。
	12月	・アンケート調査結果の分析により，生徒，保護者，教員それぞれの変容の検証。
	2月	・研究のまとめを行い，今後の課題を検証。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア 対象生徒への効果

「ライフスキルトレーニングA，B」の授業になるとどの生徒も笑顔が見られ，自分の意見を正直に話せる姿が見られるようになった。

受講生徒3名は中学校まで特別支援学級(知的障害又は自閉症・情緒障害)に在籍していた。入学当時は周囲の生徒の発言や反応を気にしたり投げやりな言動をとったりと，劣等感や低い自己肯定感をもっていることが伺えた。しかし，ライフスキルトレーニングでの学習により，「できる，分かる」という実感を得られるようになり，自立と社会参加に向けた前向きな態度が見られるようになった。

集団での一斉授業では，受講生徒は学習内容が理解できなかつたり集団活動に参加できなかつたりすることが多く，また教師側も生徒の自尊感情を考慮すると「どのように対応したらよいのか」等を個別指導することが困難であった。個々の生徒の実態

に合わせたライフスキルトレーニングでの指導により、気持ちが落ち着かなくなった時の対応方法や自分の特性に合った学習方法を身につけることで、少しずつではあるが各教科の授業でも前向きに学習課題に取り組むようになった。

思春期の生徒にとって、他者との違いを受け入れることは容易なことではないが、自分には得意なことと苦手なことの差が大きいということを理解できるようになり、抑うつ的な態度や乱暴な行動などの二次障害も緩和できたと言える。

イ 教員への効果

研修等により教員の認識が進んだことに加え、入学前の調査や中学校からの引き継ぎ、入学後のチェックシートの結果を活用し生徒の実態把握を行うことで生徒への理解は深まった。ICTの活用、板書の工夫、ワークシートの工夫などを行い、より分かりやすい授業が行われるよう授業の工夫・改善が進んだ。

対象生徒の実態把握にあたっては、1年次生の担当職員と特別支援教育コーディネーター等関係者が連携し、学習面や学校生活面で支援が必要と思われる生徒を把握した。該当する生徒の出身中学校へ特別支援教育コーディネーターと担当職員が訪問し、改めて中学校での様子を聞き取り、1年次生の職員でケース会議を行ってその後の指導に役立てた。

多くの教員が研修に積極的に参加し、教育的ニーズのある生徒の理解や支援に関する研修に努めた。

また、特別活動部が中心となり、生徒が自主的に活動できるよう様々な学校行事を企画・運営した。その際、対象生徒の活躍する姿を目にすることで、ライフスキルトレーニングの指導による効果を実感し、教員全体の意欲の向上につながった。

ウ 保護者等への効果

(保護者)

「ライフスキルトレーニング A, B」を受講していた生徒の保護者は、生徒の特性について理解が深まり、卒業後の進路について担任、授業担当者と話し合いを行うことができた。保護者に対し療育手帳についての説明を行うことができ、取得について前向きに考えてもらうことができた。結果的に相談機関紹介後、発達検査を受け療育手帳の取得につながった生徒もいた。療育手帳を利用した就労の方法の一つとして、特例子会社への就職が考えられると伝え、どのような企業があるか説明を行ったところ、生徒の将来についての不安が和らいだ保護者もいた。

また、保護者全体については、モデル校の教育活動に理解・関心を示す保護者が増加し、入学時調査等の学校アンケートに中学校までの状況や家庭での状況等を詳しく書く保護者や入学前に行っている高校生活相談を利用する保護者が増え、入学前の生徒の情報がより多く提供されるようになった。

(他の生徒)

教室の環境整備や授業の工夫・改善が進み、積極的に授業に取り組む生徒が増えた。

ICTなどの活用により生徒の学習意欲が向上した。

相談室などを活用し、学校生活に適応できるようになった生徒も増えた。中学校で不登校であった生徒が、高校に入ってから登校できるようになったケースも多くあった。

生徒会活動、部活動、ボランティア活動等で活躍する生徒が増え、学校全体で生徒が自主的に行動できる様子が多くみられるようになった。

(その他(地域の理解等))

近隣の中学校との連携をとり、個別の教育支援計画、個別の指導計画の引き継ぎを行った。個別の教育支援計画等がない生徒についても、中学校訪問等で情報交換を行うことができた。

本事業の取組による効果が生徒の普段の様子に表れつつあることで、本校の教育活動に関心を示す地域住民や近隣中学校の保護者が増加した。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア 自立活動について

自立活動に関しての専門的知識や指導経験を有する教員が高等学校に通常いない。自立活動を高等学校で実施するにあたっては、職員の専門性向上のための研修や校種を超えた授業参観等をとおして高等学校にふさわしい自立活動の姿を築いていくことが必要である。

イ 個別の教育支援計画等の引き継ぎについて

高等学校で自立活動等を行うためには、生徒の実態を把握することが必要不可欠である。毎年の引き継ぎを通して中学校との連携を深め、個別の教育支援計画等の円滑な引き継ぎのシステムを構築していくことが必要である。

ウ 授業改善について

全ての生徒が参加し、授業内容を理解できる授業を目指して、改善に取り組んでいくことが必要である。生徒の目線に立って見やすい文字の大きさや注目を促す色等を検討し、教室の掲示や板書方法の、その学校の実態に即したモデル作りを行い、共通理解を図ることが大切である。

エ 生徒の自尊感情への配慮について

「ライフスキルトレーニング A, B」を選択科目の1つとして位置づけているため、生徒間で特別な教育課程であるとの意識は緩和されている。自立活動の指導の目的については受講前に生徒本人、保護者に対して十分に説明を行い、理解し納得した上で受講の決定を行った。さらに、学習内容について高校生が受けるものとして適当なものであるか細心の注意を払い、劣等感などを持たないように配慮した。併せて、学校の環境美化活動や装飾などの活動を行い、教員や他の生徒から褒めてもらう場面を作ったことで自己肯定感が高められた。

以上のような生徒の自尊感情への配慮が大切であり、それは、指導の効果を高めることにつながるものであることが分かった。本事業での対象生徒数は限られたものであったため、自尊感情への十分な配慮ができたが、対象生徒数が増えた場合でも今回同様の丁寧な対応が必要であると思われる。